

Museum News

秋田県立博物館ニュース

収蔵資料紹介（民俗部門）

抱き卵

平成29年は酉年ということで、鳥に関する民具をご紹介します。

寄贈していただいた藤里町の方によれば、巣箱へ抱き卵を一つ入れておくとそれに誘発されて、鶏が卵を産むようになるそうです。石膏のような軽い石で出来ており、昭和20年代頃に流行しました。

目次

表紙・目次 P.1

企画展紹介

（報告）企画展「秋田の昆虫」 P.2

（報告）企画展「四季のたのしみ くらしのいろどり」 P.3

（報告）企画コーナー展「子供に伝えたい秋田の先人」… P.4

（報告）企画コーナー展「菅江真澄のふるさと」
「真澄クイズに挑戦」 P.5

学芸ノート

（歴史部門）「差上り百姓とは何か」 P.6

（工芸部門）「秋田の金属工芸」 P.7

平成 29 年度展示計画 P.8

企画展

秋田の昆虫

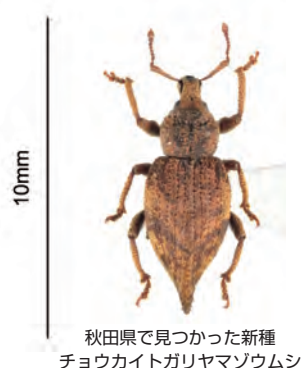


○秋田県にもこんなにいろいろな昆虫がいる！ 1,236種の「秋田の昆虫実物図鑑」

これまでに県内で見つかったことがある昆虫は約5,000種ですから、展示したのはその1/4くらいです。また、虫眼鏡がないと見えない小さな昆虫ばかりのコーナーをあえて作ってみました。実際に1cmにも満たない種の方がずっと多いのです。さらに1種ごとに簡単な説明と★の数で表した「珍品度」を付けてみました。このため解説の分量が多くなってしまったのですが、「図鑑」らしくはなりました。

○秋田の昆虫にはまだ新発見がたくさんある！ なぜか見つからない虫や新種を展示

となりの岩手県では約9,000種、多い県では10,000種を超えているのに比べると、秋田県で知られている昆虫の種数はずいぶん少なめです。これは実際に少ないのではなく、まだよく調べられていないだけなのです。その分、「秋田県で初めて発見」ということになる種がたくさんあるはずです。さらに、秋田県どころか世界で初めてになる種、つまり新種が見つかる可能性もあります。秋田県で採集された標本をもとに新種として命名された種を10種展示したのに加え、まだ名前がない（これから新種として命名されるかも知れない）種も展示しました。



秋田県で見つかった新種
チョウカイトガリヤマゾウムシ

○標本をじっくり見よう！ 「秋田のチョウ総選挙」と「どアップクイズ」

今回初めて「秋田県のチョウを選ぼう～秋田のチョウ総選挙～」を企画しました。予想よりたくさんの方が投票してくださり、投票総数は1,964票。トップになったのは、242票を獲得したミヤマカラスアゲハでした。投票のためにチョウのコーナーをもう一度じっくり見直してくれた人もいたようです。また、昆虫の一部だけを超拡大した写真から名前を当てるクイズを出してみました。比較用の標本から正解を見つけようと一生懸命ルーペで見ている子どもたちもいました。



マニアックすぎる「どアップクイズ」



ミヤマカラスアゲハ（春型オス）

昆虫の展示というと、職員の間でも子ども向けのイメージがあるのですが、お客様を見ていると、解説を読んでにやにやしている（かつて昆虫少年だった？）オジサンや、ガの標本を食い入るように見ている若い女性（美大生だそうです）など、さまざまな方がいました。昆虫もさまざまですが、それと向き合う人もさまざま。楽しむためのいろいろな手がかりが展示に求められていることを感じました。

（生物担当 梅津一史）

展示紹介 平成28年11月19日(土)～平成29年4月2日(日)

「四季のたのしみ くらしのいろいろ」

昭和30年代の秋田は、秋田国体や東京オリンピックが開催され、人々のくらしが大きく変わった時期でした。それと同時に、古くから受け継がれてきた祭りや行事も変化を迫られます。

本展示では昭和30年代のくらしの様子とともに変化していく祭りや行事を、四季ごとに紹介しました。

展示構成

1 冬から春へ 月の満ち欠けと正月行事、健やかな成長を願う、雪国の春、「金の卵」の誕生	2 春から夏へ 農具の変遷、わざわい来るな！秋田の鹿島信仰、夏祭りツアーの誕生	3 暮らしのなかで 普及する電化製品、便利な道具、消えゆく八郎潟
4 夏から秋へ 集落を守る、先祖をまつる・先祖になる、豊作を祝う、さまざまな芸能	5 秋から冬へ みんなで祝う結婚式、出かせぎ者を送る、一年の無事を感じ、新たな年を迎える	6 秋田を売り出す 秋田国体と東京オリンピック、観光と秋田、民芸品世界へ

にかほ市象潟町で行われていた小正月行事の再現



男鹿のナマハゲ

現在2月第2金・土・日に行われている
なまはげ柴灯まつりが行われるようになったのは昭和39年からでした。



氷冷式冷蔵庫と
電気冷蔵庫



シウエキサマ(能代市ニツ井町小掛)



民芸品の数々この時期存続を危ぶまれていた伝統工芸技術は、秋田国体やオリンピックに向けた民芸品を作るために息を吹きかえました。

(民俗部門 丸谷仁美)

秋田の先覚記念室 企画コーナー展

「子どもに伝えたい秋田の先人」

～成田為三・石川理紀之助・白瀬矗～

秋田県立博物館の「秋田の先覚記念室」は平成8年に開設され、今年で20年が経過しました。節目となる今年は「子どもに伝えたい秋田の先人」と題して、子ども向けの解説書としたり、展示パネルの字体を大きくするなど、小学生の興味・関心が持てる展示を試みました。結果的にはご年配の方も含めた幅広い年齢層にとって分かりやすい展示となりました。

郷土秋田を代表する先人には、日本を代表する音楽家「成田為三」、農村経営の立て直しを行った農業指導者「石川理紀之助」、世界的な探険家「白瀬矗」の3名の偉人についてご紹介いたしました。また、連携事業として、ロビーコンサート「博物館で聴く成田為三の世界」を11月6日(日)に開催いたしました。当日は100名をこえる方々にご参加いただき、成田為三の童謡をバイオリンの音色で楽しんでいただきました。



展示の様子



ロビーコンサートの様子

(秋田の先覚記念室 池端広樹)

展示報告 平成28年7月16日(土)～8月28日(日)

企画コーナー展 (菅江真澄資料センター)

菅江真澄のふるさと



菅江真澄の故郷(ふるさと)はどこか。これは真澄研究が始まって以来の課題であり、最大の謎ともなっています。以前から岡崎説と豊橋説が唱えられていますが、その両説がある一方で、「三河国人」を自称する真澄について、故郷を厳密に特定する意味はあるのだろうかという疑問も呈されています。

展示では、真澄の故郷を岡崎と豊橋のどちらかに決することを目的とはせず、資料を整理しながら、この問題をとらえ直してみました。

〈展示構成〉

- 1 故郷をさぐる意味
- 2 真澄の故郷をめぐる謎
- 3 故郷論争の争点
- 4 出生地と故郷との違い、考え方
- 5 三河国人としての真澄
- 6 愛知県の偉人としての紹介
- 7 真澄、故郷を想う
そして…
- 「8 結局、真澄の故郷はどこなの？」

故郷(ふるさと)を辞書で引くと「生まれ育った土地」とあります。しかし、真澄の場合、生まれた土地と育った土地が違うと考えた方がよさそうです。

真澄の記述からは、岡崎に強い愛着(帰属意識)を持っていたことが言えます。自我の目覚めたところが岡崎だったとすると、その意味では、真澄の故郷は岡崎だったと言えるでしょう。

一方で、真澄の死後、二人の人物が訪ねた「熱海郡」(豊橋(吉田)のある渥美郡であろう)の家が、真澄の生家(あるいはごく近い親類)であったとすれば、故郷をうまく説明できないことになります。

私たちが普段に使う「故郷」という言葉が、真澄の場合、簡単に当てはまらないところに、真澄の故郷をめぐる問題の難しさがあります。あなたが問う「故郷(ふるさと)」という言葉の定義によって、答えは変わってくるのです。そこで、真澄が自称した「三河国人」として真澄を読むことが、私たちが真澄に接する一つの姿勢だと考えます。

展示報告 平成28年10月22日(土)～12月18日(日)

企画コーナー展 (菅江真澄資料センター)

真澄クイズに挑戦

—真澄を読み、真澄を知るための50題—

菅江真澄資料センターでは、展示や博物館教室などの活動の際、真澄に関するクイズを出題することがあります。これは、クイズをきっかけにして真澄の記録に親しんでいただくとともに、記録を深く読み解くきっかけになればと考えてのことからです。

真澄の図絵や文章には、真澄が生きた時代を知るたくさんの事柄が含まれています。ただし、読む人の知識や興味によって、注目する事柄や言葉はさまざまです。クイズを手がかりにして、それまで気がつかなかったような新たな事柄に目を向け、新たな読み方ができるのではないのでしょうか。

クイズは全部で50題。県内の日記9題、県外の日記9題、遺墨資料6題、日記以外の著作6題、月の出羽路仙北郡20題について、一部の資料を展示しながら出題し、解説資料で答えと解説を示しました。

問題 《月の出羽路仙北郡九》全集七巻305頁より

・真澄は、鶏の鳴き声を表現しています。どう表現しているのでしょうか。ただし、この表現は、真澄に限らず古語では一般的な表記です。

①かけろ ②くけろ ③こけろ

解説

・現在、鶏の鳴き声は一般に「コケコッコー」と表記されますが、古語では「かけろ」と表記されます。辞書を引くと、9世紀後半の神楽歌が用例として示されますので、随分古くからの表記であったことがわかります。これは、歴史的仮名遣いで、促音や長音が現在のように表記されなかったことも関係すると考えられます。同じ鶏の鳴き声でも、アメリカでは「コッカドウドウルドゥー」、ロシアでは「クカレクー」とされます。これは、発音の違いによるもので、母音が5音の日本語は、発音が単純化される傾向にあるといわれます。(答えは、解説の冒頭にあります。)

(菅江真澄資料センター 松山 修)

差上り百姓とは何か

江戸時代に「差上り百姓」「指上り百姓」と呼ばれた人がある。当館に江戸時代の三又村(湯沢市駒形町)の肝煎茂木亀六が残した文書があり、そのなかにも登場する。

たとえば安政4年(1857)9月、茂木亀六が肝煎となり、前肝煎から村の文書を引き継いだとき、前肝煎・長百姓と「差上り百姓」が立ち会った(当館蔵茂木久栄家資料3019「万代日記帳」)。また、村の寄合に肝煎・長百姓と「指上り」が参加した(同前安政5年正月9日条)。藩に提出する願・届書の差出人はもっぱら肝煎・長百姓で、差上り百姓は署名しないことが多い。

表1(3019「万代日記帳」)と表2(同3034「諸願書上帳」)をくらべると、安政4年の差上り百姓は、表2の高持百姓と同じである。

差上り百姓＝高持百姓とする用例は他にもある。茂木亀六が戸波村肝煎役を一時兼任するよう命じられたとき、文久元年(1861)2月、亀六は事務処理を相談するため同村をたずねた。そのとき「長百姓并高持御百姓」と「打寄相談」し、ついで長百姓3名、「差上り百姓」10名の立会のもと文書引継を実施した。ここでも差上り百姓＝高持百姓である可能性が高い。

この場合の「高持」は、単に高を持つという意味ではなかろう。それなら人数はもっと多いはずである。表2の高持百姓は4人で128石余を所持し、肝煎を凌駕する者もある。その前年の三又村の村高は当高463.597石で、うち村外者の所持する「鍛延符人高」が150.132石、村内農民の「地元符人高」は313.465石である(3034「諸願書上帳」)。つまり高持百姓4人で村内百姓持高の4割を占めていた。ここでは大高持を特に高持百姓と呼んだのだろう。

『山本町史』に、百姓の雪駄使用を禁ずる規定に対し、村が「肝煎・扨人・長百姓并指上りのもの」を禁止の対象外にできないか伺い出た史料が載っている(『山本町史』p1008)。「指上りのもの」は階層的な概念で、長百姓の次に位置している。

元治元年(1864)5月、三又村が平均検地100周年の法要を執行したとき、参列者に酒食を振る舞ったが、それは表3のように、3グループに分けて行われた(3019「万代日記帳」)。

表3によると、差上り百姓は小百姓ではない。村役人のようにもみえるが、他村の百姓である鍛延百姓にも「差上り」の語が用いられ、かつ小百姓と区別されているから、経済的概念のようである。「上り」という表現からは、階層を上昇させた人という含意が感じられ、江戸後期の農村の状況変化にかかわって生まれた言葉かも知れない。

まだ不明な点が多いが、差上り百姓は願書などの公式文書には原則署名せず、村の節目の行事で重きをなし、寄合にも参加する村政参画者で、恐らくは村内の経済有力者だった。

表1 長百姓・差上り百姓の構成

年月日・用務	長百姓	差上り百姓
安政4(1857)9・21 肝煎交代時の文書引継の立会人	重蔵 庄三郎 理右衛門 伊兵衛	七郎兵衛 吉郎兵衛 孫右衛門 十兵衛
元治1(1864)5・16 平均検地百年記念供養の施主	庄三郎 孫右衛門 与助 孝作	七郎兵衛 平助 吉郎兵衛 十兵衛
元治1・12・11 肝煎交代時の文書引継の立会人	同上	同上

表2 万延元年(1860)肝煎・長百姓ら所持高

年月日・用務	名 前	所持高(石)
肝煎	亀六	23.816
本郷 長百姓	重蔵	5.618
	庄三郎	0.637
枝郷 長百姓	伊兵衛	2.663
	利右衛門	7.258
高持百姓	七郎兵衛	67.052
	十兵衛	11.977
	吉郎兵衛	31.237
	孫右衛門	17.813
筆役	孝作	0.504

表3 平均検地100力年法要での酒食振舞

①	肝煎宅で酒食	長百姓 差上り百姓 平均検地時役職者子孫 鍛延差上り百姓
②	喜助宅で酒	村内の小百姓
③	野外で神酒	鍛延小百姓

(歴史部門 新堀道生)

秋田の金属工芸～^{つば}鐔にみるわざと美

秋田には優れた金属工芸の技術があります。グリ彫り、^{もくめがね}杳目銅です。刀の鐔を加工する技術として開発されました。考案したのが初代秋田正阿弥と呼ばれる鐔職人、^{しょうあみ}正阿弥伝兵衛(鈴木重吉)といわれています。今回は、後の金属工芸の世界に多大な影響を及ぼした伝兵衛と、そのわざと美についてご紹介します。

そもそも鐔は、刃と柄の間に位置し、戦いの最中に手が刀身の方へ滑って怪我をしないよう作られたのが始まりです。初めは実用的な目的をもった鐔でしたが、時代が下るにつれ装飾的な要素が強くなっていきます。特に江戸時代は、鐔のわざと美が最も華やいだ時代です。優れた職人によって多彩な意匠の鐔が作られていきました。

このような時代の中、伝兵衛は庄内の鐔職人の家系に生まれました。江戸で修行後、26歳で三代秋田藩主佐竹義処に抱えられます。緻密な細工と大胆な構図は、現在の我々が見ても息を飲むような迫力があります。作品の中には、まるで現代アートのような抽象的表現も見られ、当時の既存概念や価値観を超えた伝兵衛の柔軟で自由な発想を見ることができます。

伝兵衛は、鐔加工の技術開発にも力を入れます。グリ彫りと杳目銅は伝兵衛を代表する鐔の加工技術です。グリ彫りは、金属の板金を交互に十数枚重ね、鍛接した上で、唐草文や渦巻きなどの模様を彫り込む技法のことです。彫り下げた部分に年輪のような文様が現れます。硬度、引張力、融点など性質の違う金属を幾重にも重ね合わせ、一枚の金属の板に加工することは容易ではありません。さらにそこに迷いのない均整の取れた彫りを入れており、彼の技術力の高さを物語っています。

グリ彫りを、更に発展させた技術が杳目銅です。グリ彫りと同じく、異なる地金を重ね合わせて鍛接し、そこから鑿で削ったりねじりなどの動作を加えながら打ちのばすことで、平らな板金に木目のような肌の模様を出していく技法です。津軽塗のような漆芸の技術を応用したとも言われています。伝兵衛の他遺作が無いことから、長い間途絶した技術といわれていました。途絶と復活を繰り返し、ようやく明治期には秋田市の進藤鐵治がそのわざを復元します。杳目銅は、それほどまでに特殊な技術ということがうかがえます。

伝兵衛は江戸時代、卓越した技術により、武士の装身具である鐔を、芸術作品へと昇華させました。そのわざと美は、現代においても、指輪などのアクセサリーやキーホルダー、ネクタイピンなどの装飾品の製作技術として受け継がれています。伝兵衛の挑戦的な発想と独創的な技術は、時代を超えても尚、変わらず人々のくらしを華やかに彩っているのです。

(工芸部門 斉藤洋子)



鐔 丸耳糸巻透かし 正阿弥伝兵衛 当館蔵



飾り鐔 根田雄一郎 当館蔵
伝兵衛の開発した「グリ彫り」の技術で
鐔の制作を試みた作品です。



杳目銅 花器 進藤鐵治 当館蔵

平成29年度 展示予定

※変更の可能性もありますので、最新の情報は博物館ホームページで御確認ください。

企画展示室

企画展

足もとの久保田城下

ー掘り出された武家の暮らしー

出土遺物を手がかりに、考古学・歴史学の調査結果をあわせて、江戸時代の久保田城下の暮らしの復元を試みます。

4月26日(水)～6月25日(日)

特別展

妖怪博覧会

～秋田にモノノケ大集合!～

絵画資料や冊子などから妖怪の姿を紹介し、人々が想像する妖怪とは何かを考えてみます。秋田県内の妖怪の資料も紹介します。

7月15日(土)～8月27日(日)

企画展

鳥海山の自然史

平成28年に日本ジオパークに認定された「鳥海山・飛鳥」。鳥海山の自然についてさまざまな面から紹介します。

9月23日(土)～11月12日(日)

企画展

植物を編む

ー暮らしの中の編組ー

縄文時代から現代まで続く編み組みの技術や、県内に残された編組品からみる秋田の地域性、そして現代の用に応じた職人のわざと美についてせまります。

12月2日(土)～4月8日(日)

菅江真澄資料センター企画コーナー展

秋田の先覚記念室企画コーナー展

ふるさとまつり広場

●天神人形

4月22日(土)～6月9日(金)

●自筆本、春の特別公開～秋田の旅14冊

5月23日(火)～6月11日(日)

●七夕絵どうろう

6月10日(土)～8月20日(日)

●高橋友鳳子コレクションと真澄

7月15日(土)～8月27日(日)

ロビー展示

●楽しいしぼり染め作品展

7月22日(土)～8月20日(日)

●自筆本、秋の特別公開～雪の出羽路平鹿郡14冊

9月20日(水)～10月9日(月)

●野良着

9月22日(金)～11月2日(木)

●後藤宙外と書簡

9月23日(土)～11月26日(日)

●雑纂資料の魅力

10月14日(土)～12月10日(日)

●ナマハゲ

11月3日(金)～1月31日(水)

●ひな人形・押し絵

2月3日(土)～4月7日(土)

●真澄、若き日の旅

3月17日(土)～5月13日(日)